

治療を開始したが、脳圧亢進症状が進行、CT 上も膿瘍腔の拡大を認めたため、第23病日に脳外科的に穿刺排膿術を施行した。培養の結果、2種類の嫌気性菌、*Peptostreptococcus micros* と *Bacteroides* が検出された。計4回の排膿を施行、薬剤感受性の結果より、LMOX と PAMP/BP を選択した。LMOX の膿瘍内濃度を測定したところ19 μ g/ml (MIC 0.05 μ g/ml 以下)であり、膿瘍内に充分移行していると考えられた。また、rhG-CSF 剤が好中球減少のみならず正常好中球の機能を高めるという作用を利用し投与を開始した。現在引き続き治療中であるが、膿瘍はCT 上完全に被膜化され、縮小傾向にある。

11. 加齢による *Helicobacter pylori* (Hp) 除菌率低下についての検討

(成人医学センター、¹青山病院)

秋本真寿美・橋本 洋・新見晶子・
北村容子・大淵美帆子・安達由美子・
安部康二・石黒久貴¹・土谷まり子・
渡辺七六・栗原 毅¹・前田 淳・
重本六男・山下克子・横山 泉

加齢と Hp 除菌療法の成功率の関係を検討した。

[対象と方法]30~78歳の50例、使用薬剤はランソプラゾール60mg+クラルスロマイシン800mg、疾患は胃潰瘍8例、胃十二指腸潰瘍17例、十二指腸潰瘍10例、胃炎4例である。除菌の判定は除菌療法終了後4~6週後に内視鏡検査にて培養、CLO テスト、鏡検を行うとともに、同日の内視鏡検査前に¹³C 呼気テストを施行した。そしていずれも陰性を除菌成功例とした。なお呼気テストは7パーミル未満を陰性とした。また菌培養より薬剤耐性を検索した。

[結果] 除菌率を表に示した。

[考察] 各検査での除菌率の違いは菌量低下により、

除菌率

	30	40-	50-	60-	70 歳	平均
CLO テスト	75	73	64	67	0	63%
培養	100	64	50	89	25	59%
鏡 検	75	75	33	75	0	52%
呼気テスト	100	43	9	13	0	28%

胃粘膜を生検する方法では、Hp 検出は困難であるが、胃内全体の菌量を反映する呼気テストではかなり検出可能な例があり、除菌後の評価法として呼気テストが優れている。特に高齢者では非侵襲的でもあり適していると思われる。高齢者は長期感染の経過中の種々の

薬剤の使用のため薬剤耐性菌は増加したと考えられ、その結果として除菌率低下をもたらしたと考えた。これに対しては高齢者では特に耐性を検査した後、除菌療法を施行すべきと思われる。

[まとめ]①以上から除菌判定では正確さ、非侵襲性から呼気テストが有用であった。②高齢者では除菌前の耐性菌の検索が必要と思われた。

12. 副鼻腔に関連する疼痛について

(第二病院耳鼻咽喉科)

高野信也・荒牧 元・岡村由美子

頭痛や顔面痛を訴え耳鼻科を受診する患者は多い。今回我々は副鼻腔と関連する疼痛について検討したので報告する。

[対象]1993年1~12月までに頭痛または顔面痛を主訴として当科を初診した症例は92例であり、そのなかで副鼻腔に関連した83例を対象とした。

[結果] 男性49例、女性33例で平均年齢は31.9歳であった。罹患側は一側性が64例、両側性が18例であった。原因疾患は急性副鼻腔炎77例(92.8%)、歯性上顎洞炎4例(4.8%)、三叉神経痛2例(2.4%)で上顎腫瘍や外傷例は認めなかった。急性副鼻腔炎202例中頭痛または顔面痛を訴えた症例は81例(40.1%)であった。一側例では頬部痛は上顎洞、両側性では前頭痛は前頭洞が原因であることが多かった。

副鼻腔と関連した特殊な症例として Vidian 神経痛を1例経験したので提示する。

[症例]68歳 女性 主婦、1994年2月頃から鼻閉後に左顔面痛をおこし、繰り返し当科を受診した。CTにて右上顎洞に陰影を認めたが、上顎洞穿刺細胞診ではClass I であり、顔面痛とは無関係であった。疼痛発作時に中鼻道をキシロカインで麻酔すると疼痛は軽減した。Trigger point が中鼻道であり、疼痛も激しい時は頸部から胸部まで疼痛を認めることから Vidian 神経痛と診断した。上顎神経ブロックを4回施行し、Carbamazepin の内服でコントロール可能となったため現在外来にて経過観察中である。

非定型的顔面痛や頭痛の原因として主に副鼻腔があげられるが、副鼻腔内の悪性腫瘍や他疾患により生じる可能性もあり、耳鼻科的な検索も必要と考える。

13. 食道発声および電気喉頭発声患者の呼吸筋の働き

(呼吸器内科)

須藤孝子・吉野克樹・金野公郎

(耳鼻咽喉科)

今井容子・吉原俊雄・石井哲夫

〔目的〕呼吸筋の働きには換気機能と姿勢の保持や発声などの非換気機能があり、発声は呼吸筋によって調節された呼気フローにより行われる。一方、喉頭摘出患者の発声は食道発声や電気喉頭発声であり、肺気道系とは関係なく行われる。今回、喉頭摘出患者の発声における呼吸筋の働きについて検討した。

〔対象および方法〕対象は喉頭全摘後、気管切開部で呼吸し、食道発声や電気喉頭発声を行っている患者で、特定文章の朗読時の各パラメーターを測定した。測定パラメーターはニューモタコメータによる口、気管切開部の気流速度、気流量、マグネットメータによる胸部、腹部の働き、各呼吸筋の表面筋電図である。また一般肺機能、呼吸筋力 (MIP, MEP) も測定した。

〔結果〕①食道発声会話中、FRC は安静換気に比し低下した。chest wall configuration も胸壁、腹壁が内方変位した。②発声直前、著明な腹壁外方変位とともに、口腔気量変化 (食道換気) と安静時の1/5の気管切開口気量変化 (肺換気) を認めた。③発声は呼気中間より、腹壁の著明な内方変化とともに開始した。④食道発声上達者は呼気、吸気筋力ともに強かった。⑤電気喉頭発声は声帯発声と同様の chest wall configuration を示した。

〔まとめ〕食道発声は、まず腹壁を内方変位させ FRC を意図的に下げ、この反発力を使って腹壁を外方変位させて胃内に空気を呑気、そして腹筋を収縮させ胃内の空気を排出させ発声源とすることが示唆された。電気喉頭発声は上気道フローから中枢へのフィードバックコントロールはないが呼吸筋の動きは声帯発声同様であり、呼吸筋の動きが呼吸中枢にプログラミングされていることが示唆された。

14. 急激な四肢マヒを呈した頸椎椎間板ヘルニアの1例—単純 X 線写真と MRI の有用性—

(第二病院¹放射線科,²脳外科,

³内科 I)

横山結子¹・

小野由子¹・河合千里¹・岩井恵里子¹・

塩沢敦子¹・井出光信²・萩原信司²・

宮城幸太²・神保 実²・和田幸子³

症例は45歳男性。3カ月前から時々背中につき刺さるような痛みが走るようになったが放置、8日前より両下肢のシビレ感があり、その1日後には歩行不能となって、救急車で他院へ入院した。同院にて、脳脊髄液の蛋白細胞解離が認められ、ギランバレー症候群として、5日間のステロイド療法を受けたが効果はな

く、マヒは上行して上肢にまで及んだため、当院内科へ転送された。

入院時の神経学的所見では C₆以下の完全運動マヒ、C₅以下の知覚障害があり、著しい頸部痛を訴えていた。髄液は細胞数1/3、蛋白575で、末梢血の白血球13,400、CPK2040であり、その他に肝機能障害が認められた。頸椎単純 X 線撮影と CT が施行され、C₅~C₇の OPLL による椎管狭窄が認められた。頸椎および胸椎 MRI で、C_{6/7}の椎間板ヘルニアによる脊髄の著明な圧排、これより上方での中心管の拡張が認められた。直ちに椎間板ヘルニアに対して前方除去術が施行され、突出した椎間板は除去されたが、脊髄の拍動は回復しなかった。術後約2週間で上肢の筋力は著明な改善をみたが下肢の知覚運動障害は固定している。

脊髄横断症状は、腫瘍、血管障害、炎症、椎間板ヘルニアなどが原因で起こるが、前3者に対して後者が原因であることは比較的少ない。しかしながら、椎間板ヘルニアはごく一般的な病態であり、椎管狭窄がある場合にはこれが脊髄横断症状の原因となることは容易である。単純 X 線写真は脊椎、椎管の状態を示すため第1に行われるべき検査であり、MRI にて椎間板ヘルニア、その他の局在性病変の有無と脊髄の状態を確認し、症状が悪化した場合は直ちに適切な治療法を選択することが必要である。

15. 馬蹄腎を伴う炎症性腹部大動脈瘤の1治験例 (循環器外科)

赤澤年正・青見茂之・中野秀昭・

大塚吾郎・平井雅也・小寺孝治郎・

佐藤志樹・橋本明政・小柳 仁

馬蹄腎を伴う大動脈炎による腹部大動脈瘤に対して人工血管置換術を施行し、良好な結果を得たので報告する。患者は69歳の男性。発熱および関節痛を主訴として近医受診し、体重減少および腹部に拍動性の腫瘍を認めたため当科受診し、CT にて馬蹄腎を伴う腹部大動脈瘤 (AAA) を認めた。AAA は偽性大動脈瘤の形態を呈しており、また入院時より抗生剤無効の発熱、白血球増多、CRP 強陽性が続いたため、大動脈炎による腹部大動脈瘤を疑った。血管造影では左右腎動脈下に AAA を認め、腎動脈および尿管の分岐異常は認めなかった。手術所見では、腸管の癒着や AAA 周囲の線維組織の増生などは認めず、AAA は、瘤壁が一部欠損した偽性大動脈瘤の形態を呈していた。瘤の中核側および末梢側の血管は大動脈硬化を認め、可及的に健常部にて吻合した。病理組織で大動脈壁に非特異的な炎症